



日常場面における既視体験の特徴：初場面既視体験との比較検討

著者	川部 哲也
引用	大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要. 2010, 3, p.17-24
URL	http://doi.org/10.24729/00005296

日常場面における既視体験の特徴

—初場面既視体験との比較検討—

川部 哲也

問題と目的

既視体験（デジャヴ体験）とは、初めての場面であるにもかかわらず、「まったく同じことが前にもあった」と感じる体験である。これまでに認知心理学、精神医学、脳神経学、文学など多様な学問領域により既視体験のメカニズムが考察されてきているが、筆者は臨床心理学の立場から既視体験の質的側面に着目し、研究を進めている。これまでの既視体験研究では「既視体験を体験したことがあるか」「体験したことがないか」という二者択一の次元で研究されることが多く、体験内容など体験の質的側面を問われることはあまりなかった（Sno et al, 1990）。しかし、近年になって質的側面を取り上げた研究がはじまっている。例えば Nepe (1983a) は、体験内容の病理性や超常体験的要素から既視体験を以下の4つに分類した。

1. 側頭葉てんかんの既視体験 (Temporal lobe epileptic déjà vu)
2. 統合失調症的既視体験 (Schizophrenic déjà vu)
3. 主観的超常体験的既視体験 (Subjective paranormal experience déjà vu)
4. 連想的既視体験 (Associative déjà vu)

Snoらは既視体験を定量的に調査するために「既視体験評価尺度 (Inventory for Déjà vu Experiences Assessment; IDEA)」を開発した (Sno et al, 1994)。この尺度には体験に伴う感情や身体の状態を尋ねる項目を含んでいるし、Brown (2004) の著書においても、既視体験の性質について一章が設けられており、体験の質的側面が重視されてきていることが示されているといえる。

一方、筆者は体験内容の中でも既視体験時における「意識のあり方」に注目して既視体験内容尺度を作成し、調査研究を行った。その因子分析から、既視体験の主観的体験内容は①離人感を伴う二重意識、②生き生きとした familiarity、③言語化不能な圧倒的強烈さ、④予知できる感じ、⑤運命・縁がある感じ、⑥必然感といった6つの因子から構成されていることが明らかになった (川部, 2006)。よって、既視体験は単一の型によって説明されるものではなくて、いくつかのバリエーションをもった体験内容から構成されるということが示されたといえよう。ゆえに、既視体験は「体

験したことがある」「体験したことがない」という二者択一の次元で捉えるのではなく、どのような体験であるかという質的側面の次元にまで踏み込んだ研究が必要であると考えられる。

ところで、現在のところ既視体験の定義は、Nepe (1983b) の “any subjectively inappropriate impression of familiarity of a present experience with an undefined past” (足立ら (2001) による和訳は “過去との関連がない出来事に遭遇したときに生じる、すべての主観的で不適切な懐かしさの感情”) というものが既視体験研究におけるスタンダードになっている。この定義を行った Nepe は著書 “*The Psychology of Déjà vu*” を著しており、既視体験を体系的に研究した最初の人である。そして、SnoやBrownなど後の既視体験研究者もこの定義に従っており、一見揺るぎない定義のように思われる。しかし、「過去との関連がない出来事」、つまり体験者にとって「初めての場面 (以下、初場面と略す)」であることという条件は果たして必要なのだろうか。筆者の収集した事例の中には、「日常場面における既視体験 (以下、日常場面既視体験と略す)」とでも名付けるべき体験群がある。これらは必ずしも初場面でない日常のありふれた一場面の中で既視体験が生じていると考えられるものである。その一例を挙げる。この報告は21歳の大学生が中学生の時に自宅で体験した出来事である。

冷蔵庫を開けた瞬間、それは毎日行うことなのに、あれって思った瞬間があった。あ、これがデジャヴ体験かなって思った。(中略) 開けたっていうこの瞬間がシチュエーション的に同じだったので。(中略) ちょっと日常じゃなかったっていうか。(中略) 冷蔵庫を開けること自体は (日常と) 一緒なんですけど、冷蔵庫に入ってるものとか、こころへんに見える視界っていうのが全く一緒だった。

この体験例は「見たことがある」という感じが生じているので、既視体験であると言って差し支えないと考えられるが、自宅の台所での出来事なので、「過去との関連がない出来事」であるという Nepe の条件を満たしていない。こうした例は決して珍しいものでは

なく、他にもこれに類似した体験がいくつか報告されている。これらの「日常場面既視体験」をどう考えればよいのだろうか。本研究の目的は、①「日常場面既視体験」と呼ぶべき事例を抽出し、②その特徴を調べることである。その際、対照群として、「初場面における既視体験（以下、初場面既視体験と略す）」との比較を行うことによって「日常場面既視体験」の特徴を描くこととしたい。

比較を行うにあたっては、以下の3つの方法を用いる。

- ① 既視体験内容尺度改訂版（既視体験内容尺度（川部, 2006）にnegative感情などの項目を加えたもの）を用いて、既視体験の主観的体験内容に差があるかどうかを検討する。
- ② 日本語版IDEA（足立ら, 2001）を用いて、既視体験に関連するとされる精神現象（離人体験・未視体験・正夢・解離体験・超能力・明晰夢・旅行体験・白昼夢）の頻度に差があるかを検討する。また、体験した既視体験の特徴（持続時間、頻度、体験時の感情、体験時の身体状態など）にも差があるかを検討する。
- ③ 面接調査において、質問紙調査だけでは捉えることが困難な、体験時の主観的な感覚を詳細に聴取する。

上記の3つの手段を用いて、多角的に2つの既視体験の特徴を捉えることが本稿の目的である。

方法

【調査協力者】大学生27名（男性4名、女性23名、平均年齢20.8歳）

【調査時期・場所】2006年2月～3月 大学内の演習室

【手続き】面接調査に先立ち質問紙調査を行い、自身が体験し最も印象に残っている既視体験1つについて自由記述を求め、その体験について、既視体験内容尺度改訂版および日本語版IDEAを実施した。およそ1ヶ月後に個別に面接調査を行い、その既視体験についての半構造化面接を行った。面接における質問は、

- ① その既視体験の時期、場所、何をしている時であったか（この段階で、その体験が「日常場面既視体験」であるか「初場面既視体験」であるかを判別するポイントをだまかに尋ねている。）
 - ② その体験に伴って生じた感覚、意識状態
 - ③ 質問紙の評定結果を見ながらの振り返り
- から成り、調査協力者に自由に語ってもらう形式で行った。

結果と考察

1. 「日常場面既視体験」事例の抽出

まず「日常場面既視体験」に該当する事例を抽出するために、全27事例を「日常場面既視体験」と「初場面既視体験」とに分類した。分類基準として、「日常場面」というのは単に場所が日常場面であるということだけではなく、その日常場面において日常的に高頻度で行う行動をしている場面であることとした（つまり、先の例でいえば「冷蔵庫を開ける」という行動は日常的に高頻度で行うものであるから、典型的な日常場面既視体験であると判断される）。よって、場所が日常場面であっても普段は行わない行動を取っていた場合は「初場面」の方にカウントした。結果、「日常場面既視体験」は14例（51.9%）、「初場面既視体験」は11例（40.7%）、不明が2例（7.4%）であった（表1）。「日常場面既視体験」の場面の内訳は、「学校」6例、「自宅」3例、「アルバイト先」2例、「通学中」2例、「駅」1例であった。面接調査により、いずれも訪れる頻度の高い日常場面であり、かつ日常的に高頻度で行う行動の最中に既視体験が生じていることが確認されたため、これら14例を「日常場面既視体験」と呼ぶことが可能であると考えられる。また「初場面既視体験」には、初めて訪れた場所で既視体験が生じたもの、あるいは、自宅や学校など場所としては初めてではないが、普段行わない行動をしていた時に既視体験が生じたものを分類した。最後に「不明」に分類されたのは、「2泊目の旅行先」「学校」がそれぞれ1例ずつであり、両例とも内容的に日常場面、初場面いずれにも分類しがたかったため、不明として分類された。

分類された既視体験の特徴を概観すると、日常場面既視体験には会話についての既視体験（この会話は以前にもしたことがある）が比較的多い（会話を含む既視体験が、日常場面既視体験では14例中11例、初場面既視体験では11例中2例）ことが示されている。風景についての既視体験（この風景は以前にも見たことが

表1 既視体験の場面の内訳

日常場面既視体験	初場面既視体験
学校	旅行先
6	4
自宅	自宅
3	2
アルバイト先	道路上
2	2
通学中	店
2	1
駅	夢の中
1	1
	学校
	1
合計	11
14	

ある、この場面は以前にも体験したことがあるなど)については、風景を含む既視体験が、日常場面既視体験では14例中11例、初場面既視体験では11例中10例となっており、明らかな差があるとはいえない。そもそも風景と会話の両方を含む既視体験が多く、この区別の有効性を確認することが困難であるともいえる。この概観によって確認したかったことは、日常場面・初場面という分類は、会話・風景という分類と必ずしも一致しているわけではないという点である。ゆえに、日常場面・初場面という分類は従来にない新たな分類の仕方であり、その差を検討することには意義があるといえよう。

2. 「日常場面既視体験」と「初場面既視体験」の主観的体験内容の数量的検討

既視体験内容尺度改訂版については、川部(2008)において149名分のデータをもとに主因子法promax回転の因子分析を行った結果、5因子が抽出された。その5因子とは、①離人感を伴う二重意識、②生き生きとしたfamiliarity、③予知できる感じ、④運命・縁がある感じ、⑤言語化不能な圧倒的強烈さ、である。川部(2006)の分析で得られた6つめの「必然感」因子が今回は抽出されなかったものの、あとの5因子は同様であったため、今回の5因子が信頼性の高い因子であると考えることができよう。さて、今回の分析においてはこの5因子を5つの下位尺度とみなし、比較分析対象である25例についてそれぞれ下位尺度得点を算出した(表2)。なお、斜交回転による因子分析のため、複数の因子に高い負荷をもつ項目が存在するが、それらの項目は複数の下位尺度に属することとした。t検定によって日常場面既視体験と初場面既視体験の下位尺度得点の差を検討した結果、5つとも有意差は得られなかった。また、質問項目ごとについても差を検討したがいずれも有意差は得られなかった。つまり、両既視体験間の主観的体験内容には差があるとはいえない。すなわち、既視体験が日常場面であるか初場面であるかにかかわらず、どちらの場面においても体験者の主観にとっては同様の「既視体験」が成立していると考えられる。

一方、IDEAの各項目について、順序尺度のものはMann-Whitney検定、名義尺度のものは χ^2 検定を行った。結果、多くの項目においては有意な差が見られなかった。例えば、既視体験の持続時間や体験が生じる時間帯、体験時の感情、体験に対する考え、体験時の身体状態・心理状態については、有意な差が見られなかった。つまり、ここでも既視体験内容尺度による検討結

果と同様に、おおむね両既視体験の内容の間には大きな差があるとはいえないことが支持されたと考えられる。その一方で、少ないながらも両既視体験間において差が見られたところが存在する。それらの点について、以下考察を行う。

既視体験の感じが状況全体に対してか状況の一部に対してかを問う項目において、日常場面既視体験は初場面既視体験よりも状況が「全体的」に既視体験に関連しているものが多く、初場面既視体験は日常場面既視体験よりも「その時により異なる」ものが多かった($p < .05$)。つまり、日常場面既視体験の方が「状況全体」に対して「体験したことがある」という感覚が生じやすいことが示されたといえる。また、既視体験時の過去体験再現感について、日常場面既視体験は初場面既視体験よりも再現感が高い傾向が見られた($p < .10$)。つまり、日常場面既視体験の方が、「以前と同じである」という感覚が強い傾向が示されたといえる。

また、初場面既視体験報告者は日常場面既視体験報告者よりも、正夢の頻度が高い傾向が見られた($p < .10$)。正夢の頻度の高さが意味するものはいろいろと考えられるが、可能性の一つとして、現実と夢の一致についての感受性が高いことが推測される。もともと既視体験が語られるときに、「夢で見た場面と同じであるような感覚」は頻繁に報告されるのであるが、現実と夢の一致があまりに強く感じられることによって、「この場面は夢で見た場面と全く同じである。これは正夢である」と解釈され、既視体験は正夢体験の一種として経験されている可能性がある。実際に筆者が面接時に聴取した初場面既視体験例においても、既視体験を「正夢体験」あるいは「予知夢体験」として経験されていたものが11例中3例見られた(日常場面既視体験例においては14例中0例であった)ことから、初場面既視体験報告者は既視体験を正夢体験として経験する傾向があるということが考えられる。この点については、体験例をもとに後述することにする。

ここまでの検討によって、日常場面既視体験と初場面既視体験との間には体験内容に大きな差はないことが明らかになった。では、なぜ日常場面であるにもかかわらず、「これは以前にも体験した」という感覚が生じるのであろうか。上記の結果より、日常場面既視体験の方が、初場面既視体験よりも、状況全体が同じであると感ぜられる程度と再現感が高いことが示されたことから考えると、初場面では「場面の一部がなんとなく似ている」というような再現感の低い体験でも既視体験であると認識される一方で、日常場面では「場面全体がまったく同じである」というような再現

表2 既視体験内容尺度改訂版の項目平均点と標準偏差

質問項目	日常場面 (N=14)		初場面 (N=11)	
第1因子：離人感を伴う二重意識				
自分の身体が自分のものではないように感じた。	2.5	(1.5)	2.5	(1.4)
まるで夢の中にいるようで、外界は現実的な感じがしなかった。	3.3	(1.5)	3.0	(1.5)
周囲の時間がゆっくり流れているように感じた。	3.1	(1.5)	3.3	(1.0)
自分の身体はそこにあるだけで、本当の自分は別のところにいると感じられた。	2.4	(1.4)	3.1	(1.4)
自分が周囲の景色に溶け込んでしまいそうな感じがした。	2.8	(1.7)	2.8	(1.4)
時間が止まってしまったように感じた。	3.3	(1.6)	3.0	(1.3)
その時の自分は、いつもの自分ではないように感じた。	2.9	(1.1)	2.7	(1.3)
時間はいつものように普通に流れているように感じた。	2.9	(1.5)	3.0	(1.1)
頭がぼうっとした。	3.4	(1.4)	2.6	(1.4)
現在と過去が混じりあってしまったように感じた。	3.1	(1.2)	3.4	(1.4)
外界を自分が見ているという実感がなく、他人の目を通して見ているような感じがした。	2.7	(1.4)	2.5	(1.4)
第2因子：生き生きとしたfamiliarity				
その状況に親しみを感じた。	3.5	(1.3)	3.5	(1.1)
なんだか嬉しい気持ちでいっぱいになった。	3.1	(1.3)	2.9	(1.3)
普段より自分が生き生きしているという実感があった。	1.8	(1.2)	2.5	(1.3)
何か大切なことを感じ取ることができたと思った。	2.1	(1.1)	2.4	(0.9)
普段に比べて、周囲の事物が鮮やかに迫ってくる感じがした。	2.7	(1.4)	2.8	(1.3)
なつかしさでいっぱいになった。	2.6	(1.6)	2.9	(1.2)
なつかしい感じがした。	3.0	(1.6)	2.9	(1.1)
その時見えていたものが美しく感じられた。	2.6	(1.2)	2.0	(1.1)
普段に比べて、周囲の様子がはっきり見えた。	2.9	(1.5)	3.1	(0.9)
第3因子：予知できる感じ				
次に何が起こるかわかるように思った。	3.2	(1.2)	2.9	(1.4)
これから起こることが、もう全部わかっていると思った。	2.5	(1.5)	2.3	(1.2)
少し先のことがわかると思った。	3.0	(1.6)	3.0	(1.5)
予想通りに事態が動きそうな気がした。	2.9	(1.4)	2.9	(1.6)
第4因子：運命・縁がある感じ				
この体験は無意味だと感じた。	2.1	(1.0)	2.3	(1.1)
ありふれた当然のこととして受け止めた。	3.0	(1.5)	2.5	(1.4)
これは運命的であると感じた。	2.2	(1.4)	2.6	(1.4)
この状況と自分とは何か縁のようなものがあるに違いないと感じた。	3.3	(1.2)	3.2	(1.5)
この状況は偶然起こったことに過ぎない、と感じた。	3.1	(1.5)	2.8	(1.3)
第5因子：インパクト				
気持ちが高ぶった。	3.4	(1.5)	3.5	(1.2)
驚き、びっくりしてしまった。	3.6	(1.3)	3.7	(1.3)
状況に圧倒される感じがした。	3.0	(1.4)	2.7	(1.6)
下位尺度平均得点				
離人感を伴う二重意識	2.9	(0.9)	2.9	(0.9)
生き生きとしたfamiliarity	2.7	(0.8)	2.8	(0.7)
予知できる感じ	3.9	(1.8)	3.7	(1.7)
運命・縁がある感じ	3.1	(0.8)	3.2	(0.9)
インパクト	3.0	(0.9)	3.1	(1.0)

() 内は標準偏差

感の高い体験だけが既視体験であると認識されるといえる。つまり、初場面既視体験は「既視体験感」が低くても成立するのに対し、日常場面既視体験は「既視体験感」が高くないと成立しないと考えることができよう。こう考えると、一見Neppeの定義からは外れるように思われる「日常場面既視体験」の方が、むしろ既視体験の主観的「既視体験感」の感覚は強いということになり、より既視体験らしい体験であるということも可能であろう。しかし、日常場面既視体験と初場面既視体験とが個人内においてどのように関連しているかは今回の調査では調べられていないため、まだこの仮説は推測の域を出てはおらず今後の精査が必要であると考えられる。ともあれ、既視体験が成立するには、その場面が「過去との関連がない場面」であるか否かという点よりも、主観的な「既視体験感」が生じているか否かが中核になっていると考えることができるだろう。その主観的な既視体験感については、今後より詳細に検討する必要があると考えられる。

3. 「日常場面既視体験」と「初場面既視体験」の主観的体験内容の事例検討

a 日常場面既視体験における主観的感覚について
さて、ここでは面接調査において得られた既視体験の語りを具体的に見ていくことにする。前節において、日常場面既視体験は、より強い主観的「既視体験感」が存在すると論じたが、それが語りの中でどのように現れるかを以下に示す（下線は筆者による）。体験例Aは冒頭に挙げた例と同じであるが、省略部分を少なくして再掲する。

体験例A：冷蔵庫を開けた瞬間、それは毎日行うことなのに、あれって思った瞬間があった。あ、これがデジャヴ体験かなって思った。「あれ、この瞬間」っていうのが、全く一緒やったって思えた。…ちょっと日常じゃなかったっていうか。…冷蔵庫を開けること自体は（日常と）一緒なんですけど、冷蔵庫に入ってるものとか、ここらへんに見えている視界っていうのが全く一緒だった。確か、親に「何かを出して」と言われて、出して…その一連の動作が一緒だった。視界に見えたものも、取り出すものも、きっと一緒やったんです。（中学時、自宅での体験）

体験例B：アルバイト中、牛乳パックを並べていて、もう一人（アルバイト）は、おにぎりとか並べていて、しゃべっている時に、ふと「あっ」とデジャヴの感覚になって。…以前とはたぶん違う会話やったん

ですけど、何か、すごい状況が同じで、相手も一緒。勘違いしたんかなあとか思いながら。けれど、体験したなっていう感はずい込み上げてきて。…相手がいる位置も一緒。相手がサンドイッチコーナーで立っていて、こっちを見ている。（10日前のアルバイト時の体験）

体験例Aは自宅での体験、体験例Bはアルバイト先での体験であり、いずれも体験者が日常生活を送っている日常場面である。とりわけ目を引くのは「全く一緒」という感覚が強く生じている点である。なんとなく同じといった程度の一致感ではなくて、ぴったりと同じであるという「すごい込み上げて」くる感覚。ぴったりと同じであるという感覚は、例えば体験例Aではただ冷蔵庫を開ける動作だけが同じなのではなく、冷蔵庫の中身、自分が覗き込んでいる視界の角度など、まさにその瞬間における全てが同じなのである。体験例Bにおいては、もう少し事態は複雑である。この事例では、会話の内容自体は異なっており、全てが同じというわけではない。それなのに、相手が同じ、相手の位置も同じという状況全体について同じであるという感覚が生じた。その感覚は「体験したなっていう感」という言葉に集約されているが、まさに既視体験とはこのような主観的な「既視体験感」によって成立していると考えられる。いわば、日常場面でありながら、そこに非日常的な既視体験感が生じているところに、日常場面既視体験の際立った特徴が見られるといえるだろう。このように、既視体験は、従来考えられていたような見知らぬ場所（旅行先や初めて行った町の街路や建物）において生じるものだけでなく、私たちが日常を過ごしている何気ない場面においてさえ、いや、何気ない日常場面だからこそ、時として非日常的な「既視体験感」を伴って立ち現れることがあるのである。その時、体験者の意識には何が起こっているのだろうか。

認知心理学の立場から、楠見（2002）は既視体験の生起を類似性認知メカニズムによって生じるものと捉えている。すなわち、「いま経験していることが、類似した過去経験を自動的に想起させる」のである。この考え方は、初場面既視体験における認知メカニズムを非常によく説明していると考えられる。「いま、ここでの体験」と「過去の経験」に類似性を発見し、両者をつなぐ心の働きが既視体験となって現れるのである。いわば、既視体験の大きな特徴は「つなぐ」機能であることを示しているといえよう。ただし、この考え方を日常場面既視体験に当てはめて考えてみる

と、少々不都合なことが生じる。日常場面においては、文字通りさほどいつもと変わらない行動をしているのであるから、「いま、ここでの体験」と「過去の経験」との間にもともと大きな差異は存在しない。なので、類似性を発見し、現在と過去とをつなぐ心の働きが機能する余地はあまりないといえる。すなわち、既視体験の「つなぐ」機能がここでは発揮できないのである。すると、日常場面既視体験において働いている機能は「つなぐ」機能とは別のものであると考えられる。日常場面既視体験においては、「いま、ここでの体験」と「過去の経験」が類似していることは自明である。それなのに、あえてそこで既視体験が生じるのは、いわば「いま、ここ」と「過去」との間にズレが生じていることを意識させられた瞬間なのではないだろうか。ここでいうズレとは、単に「いま、ここ」と「過去」とが時間的に別の地点を指しているということを示しているのではなく、「いま、ここ」と「過去」とが同様に時間の流れの中にあるという常識的な時間の概念を突き破るものとしての、根源的なズレのことをいっている。「いま、ここ」と「過去」が一致しつつ、それでいてなおかつズレがある、という相反する感覚が既視体験となって現れているのではないかと考えられる。これは「つなぐ」機能というよりは、むしろ「ずれる」機能であるといえる。哲学の立場から、上田閑照(1992)は人間存在の根本構造を「二重世界内存在」と呼び、「世界内存在としての我々は、世界の内に『於てある』ことによって、同時に、世界がそこに『於てある』虚空に『於てある』。すなわち、私たち人間は次元の異なる2つの次元に同時に存在している。いわば、私たちはもともと二重性の中に生きているのである。そのことを考えるならば、日常場面既視体験というのはその世界の根本的な二重性が「ズレ」という形で意識に侵入した状態であるといえるのではないだろうか。Bergson(1908)は既視体験について「意識の躍動が一瞬間停止すること」が第一の原因であると述べている。当たり前前に流れている時間が、なんらかの理由で一瞬停止する時、そこに既視体験が生じる。つまり、当たり前前に流れていない時間が存在するというにふと気づく時、この世界の根本的なズレに直面することになる。それが意識にのぼった時に、「ずれる」機能の発現としての既視体験として体験されることがあると考えられる。その現れ方の一つが、既視体験内容尺度の第1因子「離人感を伴う二重意識」であろう。この因子には、自分と、その自分を外から見ているもう一人の自分の二重性を体験する項目が含まれている。その意味で既視体験時の二重意識は、既視体

験の本質を捉えた意識状態であるといえるのかもしれない。

このように、認知心理学と哲学の知見をもとに、既視体験の背景にある意識の働きについて考察を行うと、初場面既視体験においては既視体験の「つなぐ」機能が前面に出ているのに対し、日常場面既視体験においては既視体験の「ずれる」機能が前面に出ていると考えられる。

b 初場面既視体験報告者の夢との関連について

次に、本論の主旨からすると脇道に逸れることになるが、IDEAの分析により、既視体験と夢の関連について興味深い結果が見られたので、その具体例を示す。そのために、初場面既視体験報告者が既視体験と夢とを関連させて語った例を挙げ、その点について考察を行う。

体験例C：(抜粋) ある時、試験の夢を見て、漢字の書き取り問題で(「厚い」という漢字)線が一本あったかなかったか悩む夢を見た。その夢を見たことは忘れていて、何ヶ月か後に、定期試験があり、問題を解いているうちに「見たことあるかも」と思っていると、本当に「厚い」という字の問題が出てきた。(中学時、学校での体験)

体験例D：(抜粋) その日の朝に、道路にスピード測定器がある夢を見た。そして、その日その道路を通った時に、いつもは取り締まりをしているところではないのに、なんと測定器があつて、夢のとおりになってしまったと思った。夢の言っていることを聞かなかった自分が悪いなあと反省した。(2ヶ月前、通学中の体験)

体験例Cは中学校、体験例Dは通学路での出来事であり、場所だけを見ると日常場面なのであるが、それぞれ特定の漢字の書き取り問題や、普段は取り締まりを行っていない道路での交通取り締まりであったため、いずれも体験者にとっては新奇な、初めての場面であると判断され、初場面既視体験としてカウントされたものである。

語りの最も大きい特徴は、一見して既視体験というよりも予知夢体験、あるいは正夢体験として語られることにある。既視体験から語り始めるのではなく、まずその前に見た夢から語られる。研究者によっては、これらの体験は既視体験と考えないという立場もありうるだろう。既視体験には、「いつどこで経験したか

思い出せないけれど、確かにこの場面は体験したことがある」というような、「原体験」の思い出せなさ・遑れなさが必ずといっていいほど付き物だからである（もしも「これは2年前に見た風景だ」といったように、原体験が容易に思い出せるような体験であれば、そもそも既視体験になどなっていない）。しかし、体験例CとDにおいては、「原体験」はその直前に見た夢である、と断定できてしまっている。よって、これらの体験を既視体験と考えないということは十分にありうる。しかし、筆者は、既視体験の本質は、体験時の主観的な「既視体験感」にあるという立場を取り、あえてこれらの体験をも既視体験の一種として考えてみたい。ただし、既視体験の中でもオーソドックスなのではなく、特殊なものであると考えている。

そして、もう一つの特徴は、どちらの例も体験者にとって嫌な体験であるということである。体験例Cはテストの問題が解けず、Dは交通違反の取り締まりを受けてしまった。このことから、その体験から受けるショックを和らげるために既視体験が生じたと考えられることもできるだろう。Arlow (1959) は、精神分析の立場から、既視体験には不安を軽減する働きがあることを指摘している。人間誰しも、初めての場面よりも見慣れた場面である方が不安は少なくなるというのである。すなわち、ここに初場面既視体験の特徴として、既視体験の「つなぐ」機能が出現したと考えることができ、これらの体験例では「いま、ここでの嫌な体験」と「過去に経験した夢」とをつなぐ働きを既視体験が果たし、結果として不安が軽減されたと考えられる。ここでも初場面既視体験では「つなぐ」機能が生じたことが確認されたといえる。

さらに既視体験と夢との関連を検討するには、2つの可能性がある。本稿のテーマでは扱えないので、ここでは可能性を示しておくに留める。1つは、予知夢や正夢についての基礎研究である。今回の調査では、夢についての詳細なデータは収集しなかったものでこれ以上の考究は困難であるが、今後の研究によって既視体験と予知夢体験・正夢体験との関連を追究することは可能であると考えられる。もう1つの可能性は、既視体験と反復夢についての研究である。これまでに既視体験を反復夢と同様に考える視点が挙げられている (Schneck, 1961, 1962) もの、その後その視点の深化が行われていない。Schneckの挙げた視点は、①既視体験は反復夢と同様に、根源的な不安を克服しようという試みである、②既視体験は反復夢と同様に、根源的にマゾヒスティックとみなせる、という2つの考え方から成る。ここに、既視体験と反復強迫、Freud

の死の欲動論との連関が浮かび上がってくる。既視体験も反復夢も同じ「繰り返し」がモチーフとなっている心理現象であるため、そこに共通して働くところのメカニズムを明らかにすることが必要である。ここではこれらを今後の課題として挙げておきたい。

結論

本稿では、まず日常場面既視体験と初場面既視体験の分類を行った。そこには、日常場面で、さらに日常的に高頻度で行う行動において、既視体験が生じている例が多数あることが確認され、「日常場面既視体験」と呼ぶのが妥当である体験群があることが示された。そして、日常場面既視体験の特徴を明らかにするために、初場面既視体験との比較を行った結果、主観的体験内容としてはいずれも差が見られなかった。つまり、両既視体験とも、体験者の主観にとっては同様の「既視体験」が生じていることが明らかになった。このことより、既視体験においてはNeppesの定義に挙げられているような「初場面であること」といった場面の特性よりも、非日常的な一致感などの主観的な「既視体験感」という感覚が体験を成立させている中核であると考えられた。その意味で、広く受け入れられているNeppesの既視体験の定義は再考される必要があると考えられる。

また、日常場面既視体験と初場面既視体験の特徴をそれぞれ考える中で、初場面既視体験においては既視体験における「つなぐ」機能が、日常場面既視体験においては「ずれる」機能が前面に現れていることが示唆された。すなわち、日常場面既視体験は「いま、ここ」と「過去」とが一致しつつ、なおかつずれているという二重性を含んだ事態であることが考えられた。

最後に、初場面既視体験の体験例の中に、予知夢体験・正夢体験が含まれることを報告し、既視体験と夢との関連を考究することを今後の課題として挙げた。

付記

本研究は、2009年8月に日本心理学会第73回大会にて発表した内容を加筆修正したものである。また本研究は、京都大学グローバルCOE「心が活きる教育のための国際的拠点」若手研究者支援プログラムの補助を受けた。

引用文献

足立直人・足立卓也・木村通宏・赤沼のぞみ・加藤昌明 (2001) : 既視感 (déjà vu) 体験評価尺度日本語版の作成とその妥当性の検討, 精神医学, 43,

1223-1231.

Arlow, J.A. (1959) : The structure of the déjà vu experience.
Journal of the American Psychoanalytic Association, 7,
611-631.

Bergson, H. (1908/1919) : L' énergie spirituelle. 渡辺秀 (訳)
(1965) : 現在の回想と誤った認知. 『精神のエネルギー』. 白水社, pp.134-184.

Brown, A.S. (2004) : *The déjà vu experience*. New York,
Psychology Press.

川部哲也 (2006) : 既視体験における主観的体験内容
についての一考察, 心理臨床学研究, 24, 99-109.

川部哲也 (2008) : 既視体験に関する心理臨床学的研究.
京都大学博士学位論文 (未公開).

楠見孝 (2002) : メタファーとデジャビュ. 月刊言語,
31 (8), 32-37.

Nepe, V.M. (1983a) : *The Psychology of Déjà vu: Have
I Been Here Before?* Johannesburg: Witwatersrand
University Press.

Nepe, V.M. (1983b) : The concept of déjà vu.
Parapsychological Journal of South Africa, 4, 1-10.

Schneck, J.M. (1961) : A contribution to the analysis of déjà
vu. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 132, 91-93.

Schneck, J.M. (1962) : The psychodynamics of 'déjà vu'.
Psychoanalysis and the Psychoanalytic Review, 49,
48-54.

Sno, H.N., Linszen, D.H. (1990) : The déjà vu experience:
remembrance of things past?, *American Journal of
Psychiatry*, 147, 1587-1595.

Sno, H.N., Schalken, H.F.A., de Jonghe, F., Koeter,
M.W.J. (1994) : The inventory for déjà vu experiences
assessment. *The Journal of Nervous and Mental Disease*,
182, 27-33.

上田閑照 (1992) : 場所——二重世界内存在. 弘文堂.